

---

# 外れた予言

後藤詩門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

外れた予言

### 【著者名】

後藤詩門

N5536E

### 【あらすじ】

高名な予言者であるマリーの予言は外れたのか?それとも……

(前書き)

いつもそうだけど……ジャンル選定が難しい。この作品は「メテイー  
ーにしましたが、笑えるかなあ？」と筆者も首を捻るところです。  
そのあたりを踏まえて、どうぞお読み下さりませ――（・――・）

ビバリーヒルズにある豪華な邸宅の窓から、爽やかな風が舞い込んでくる。気持ちの良い春の陽気だ。

広い庭には飼い犬のレトリバーが駆け回り、植木の枝にとまつた小鳥達は伸び伸びと歌をさえずる。

そんな光景を窓から眺めつつ、これこそ理想、まさに至福の一時だとこの家の主ピーター・ニコーマンは胸の内で呟いていた。まさか、スラムでぐすぶつていた自分がこんな豊かな生活を送る事ができるなんて。

(全ては妻のおかげだ)

ピーターはぐるっと振り返り、妻のマリーを見つめた。彼女は天蓋付きの3万ドルもあるベッドに横たわっている。病気なのだ。余命はあと半年もない。

ピーターはふと気がついたように静かに窓を閉めた。病人に外気は良くない。そんな思いやりからだ。  
しかしその時、妻のマリーが急にベッドから起き上がり夫に声をかけた。

「あら、あなた。せつかく外の空気に触れられていたのに……もう窓を閉めちゃうんですね?」

「やあ、起にしてすまない」

窓際からピーターが離れ、マリーの寝ているベッドに歩み寄る。もちろん窓は閉めたまま。

「あまり外気にあたるのは体に良くないよ。君には不満だらうが……

……頼む」

そう言つと彼は妻の額に手の平をあてる。相変わらず微熱が続いているようだ。少し汗ばんでもいる。

「さう、まだ寝てなくちゃいけないよ。僕は着替を取りつてくるからね……」

着替えなんて……そんなことお手伝いせんさせれば良いのに、と妻は何度も言つ。

されどピーターはできる範囲、妻のために何かしてあげたかった。だから、大抵の家事はピーターがしている。ただ調理は無理。彼は幼い頃から火がダメな、炎恐怖症だった。

夫は熱で弱りきった妻の様子に、ただ悲しそうに首をふつた。それから、マリーを再び寝かしつける。

「じゃあ、大人しく寝てるんだよ」

最初は……彼女も素直にうなずいた。

だが、やはりどうしても譲れない思いがしたのだろう、すがるよう夫に告げる。

「ありがとう、ピーター。でもやつぱり窓から外を見ていたいの……ねつ、お願ひ」

普段は聞き分けのいいマリーであつたが、この一点に関しては譲りうとしない。

必死な形相で懇願する。

何故そこまで窓にこだわるのだろうか？  
それもここ数日、特に酷くなっている。

それは多分……彼女の生い立ちに起因するんだろうなと、ピーターは感じていた。

つまり、彼女が生まれながらの予言者であるという生い立ちだ。  
予言者？ そう、予め起きることを予知し予告するあの予言者である。

全ての人類社会において最高のVIPは誰か？

そう聞かれたら世界中の人は必ずこう答えるだろう。

それは予言者……至高の神の代弁者マリーであると。

そのくらい彼女は有名人であった。

彼女おかげで我々人類はもう半世紀にもわたって、戦争はおろか凶悪犯罪もない平和な社会に暮らしているのだ。

何か問題が……例えば、戦争のきっかけとなりうる事件が起こりそうな時など、あらかじめマリーが予知してそれを回避する行動を政治家たちに取らせる。すると争いは回避され、問題は未然に解決されるのだ。

彼女の予言は具体的で、ノストラダムスのような抽象的な所は少しもない。

3歳にして彼女はその才能を見い出され、アメリカ合衆国の中に国連の保護下に置かれ活躍する事になる。

地震やハリケーンといった自然災害は一年も前から警報が出され、犯罪者やテロリストの企みは事前に暴かれ逮捕された。それだけじゃない、株価の暴落といった経済界にも彼女の予言は恩恵をもたらしている。

まさに彼女、マリーこそ我々人類の最重要人物と呼ぶにふさわしい人なのである。

しかし、その代償は……彼女の自由。

わずか3歳にしてマリーは羽をもがれた小鳥同然になる。どこへ行くにもSOPがつき、学校すらまとも行けずには過ごす。もちろん、恋愛など……許されるはずもない。

そんな彼女だからこそ、窓から見える外の世界に憧れるのだ。それが……窓を開けて欲しいという彼女の今の願いにつながっている。

いや、実際に尋ねた事はない。これは夫たるピーターの推測。だが、たぶん間違いないだろうと彼は考えていた。

何故なら彼自身、今の豊かな生活に満足しつつも不自由を感じていたからだ。

この広い邸宅の中にはペットの犬や小鳥たちにまじり、『ついボディーガード』が20人は見受けられる。

見えない奴らを含めると、彼ら（主に予言者マリーだが）を守るガードマンは50人は下らない。うつとうしごとにこの上ない。だからこそ、彼女の気持ちも良く分かるのだ。

「分かつたよマリー。窓は開けておく」

根負けしたピーターが苦笑いを浮かべて優しく答える。

そして彼女の寝室たるその部屋の大きな窓を再び開け放つ。フワリと薰風が吹き込んだ。

「わあ、いい風……ねえ、あなた。覚えてる？ 初めて私とあなたが出会った日のこと」

長い髪をなびかせながら微笑む妻をまぶしそうに見つめ、夫が軽くうなづく。

忘れる筈ない、あれは今日のようすがすがしい春の日だった。

「当たり前だよ。スラムでつましやかに暮らしていた俺のもとで突然、警察がやってきたんだからね」

そして警官は彼にこう言つたのだ。「お前は世界を破滅させる可能性を持つ危険な男だ」と。

「あの時は、天地がひっくり返るくらい驚いたよ。しがない小市民のこの俺が世界を破滅だつて？ まったくまげたねえ」

おどけて語るピーターに妻のマリーは二口づと笑つた。

「そうね。でもあの時は可能性でしかなかつた。まだ罪を犯していないあなたを裁くわけにはいかないし……結局、常に私の監視下に置いて觀察する事になつた。私が二十歳、あなたが二十五歳の時ね」

「そうだねえ、あれから40年か。僕らはいつしか愛し合ひ、そして結婚。子供もできて幸せな晩年を過ごしてい。結局、君の予言は初めて外れたつてわけだ。ま、外れて良かったんだけどさ」

妻から話を引き継いだ夫が結論する。だが、マリーはちょっと戯つぽい瞳でピーターを見つめた。

それは彼女が夫をからかう時によく見せる目。たいていは彼の間違いを指摘する時にこんな表情を浮かべる。ピーターは少し不安になつた。

「まさか……僕がまだ世界を滅ぼす可能性があるなんて言わないよね？」

そんな夫の言葉を聞くと、妻は吹き出して大笑いした。

「そうねえ、まだ可能性はあるわよ。あなたの息子は、今どんな立場にあるかしら？　彼を使えばあなたにも世界を滅ぼす事が可能だわ」

「なるほど、その線があつたか」

合点がいったピーターが手を叩く。

そうだ、息子のネロを使うという手は考へてもみなかつた。彼は今、地球連邦の議長の役職についているのだ。

もちろん、予言者マリーの息子という肩書きが彼を若くしてこの地位につけたのだが。

しかし、地球連邦の議長が世界を滅ぼせる力を持つてはいるとは如何なる事か？

まあ、理由は簡単。

予言者たる妻のマリーの尽力によつて、世界中に平和は広がつた。そして、各国指導者たちは新時代を作るために国連に代わる組織、地球連邦を創設し全ての兵器を委ねたのである。

つまり地球連邦議長とは地球上の全ての兵力を指先一つで動かせる最高権力者なのであつた。

その初代議長がマリーとピーターの息子ネロ。

その任期は死ぬまでである。

民主主義からはほど遠く見えるこの職は、よく意地の悪い人から“皇帝”的なふうだと揶揄されてもいた。

だが、ネロはよくやつている。少なくともピーターにはやう思える。

真面目に誠実に我慢強く勤めをこなしていた。

彼なら大丈夫。決して独裁者などにはなりはしない。

たとえ自分が頼んでも、核兵器どころかピストル一つ撃つ事はない。

まして男親と息子、あまつまくいはずもない。

世間の例に漏れず、ニコーマン家でも父ピーターと息子ネロの間柄はそれほど潤滑ではなかつた。

むしろ、彼は母親大好きっ子である。

「ならば、なおさら心配はないよ」

ピーターも笑いながら言つた。

「土下座しても、ネロは僕の頼みなんか聞いてくれはしないから」

「うふふ、それもそうね。まったく男つて……親子でも仲良くなれないんだから」

さも可笑しいとばかりにマリーが言つた。今日の彼女はいつにもまして元気がいいように見える。

ピーターとしては嬉しいかぎりだった。彼は本当に彼女を愛していた。

「じゃあ、僕は君の着替えをとつて行くよ」

機嫌の良い妻を見ながら夫が妻の頬に手を伸ばす。彼の掌の温もりを感じながらマリーは幸せそうに瞳を閉じた。そして、一言だけ言つ。

「ええ……そろそろ時間だわね」

少し不思議な言い回しだつたが、そこは予言者たる妻のこと。何か考えがあるのだと、あまり気にせず夫は着替えを取りに向つ。

さて、一人残されたマリーは開け放たれた窓から外を見ていた。突然、遠くのほうで小さな爆発音が聞こえる。予想通りだ。

そして、はつきりとわかるきのこ雲が見える。

あれは核爆弾特有の雲だ。

ついに始まつた。

そう、核による世界のホロコーストが！

予言が正確ならばもうすぐマリーたちが住むニニコ、ビバリーヒルズの上空にも原子爆弾が爆発するはずである。世界の破滅のまで……あと少し。

実は彼女が夫に語った予言は外れてはいない。真実だったのだ。つまり、彼が世界を滅ぼす可能性があるといつ予言。具体的には彼の息子なのだ……

誰と結婚し、どんな環境になろうともピーターの息子は必ず精神を病み、世界を破滅させると彼女は予知していた。ならばいつそのこと彼を……つまりピーターを殺せば良かつたのに？

彼女にはそれができだし、世界政府も全面的に彼女をバックアップしてくれる。簡単なことだ。何故そうしなかつたのか？

それは……彼女こそが世界の破滅を願っていたからに相違ない。これは復讐であった。幼い頃から自由を奪われ、一生籠の中の鳥みたいに死んでしまうと知った予言者としての彼女の苦悩。それがこの救いようのない現実の理由なのである。

マリーの予言は常に正確。

彼女に未練はない。

どうせあと半年の命だ。だけどピーターは……可哀想だと彼女は思う。

マリーにとつて、最初はただの復讐の道具に過ぎなかつたピーター。だが、いつしか素朴な彼の性格に安らぎを覚えるようになつていた。

彼の命だけは助けたい。今、ピーターが向かつた地下の衣装部屋はちょうど核シェルターになつてゐる。あそこにいれば彼だけは生き残れる。一人ぼっちではあるが……

(でも、はたしてそれは彼のためなのかしら？)

マリーはふとそんな疑問を持つ。確かに自分なら一人だけで生きていくなど耐えられないかもしねない……

そう考へると彼女は大声で夫を呼んだ。もう間に合わないかも知れない。

だが……近くで「……」と、声がする。

彼女が振り向くとそこには何と夫がいた。手には彼女の衣装ではなく、ピストルが握られている。

「最後くらい君と一緒にいたいと思つてね」

夫が妻のもとに近寄る。どうにうじとかしら？　と困惑するマリー。

「いわなることを……知つてたの？」

「ああ」

「どうして？ ひょっとしてあなたも予言者だなんて言わないわよね」

「簡単な事だ。君は寝言の多い女性だからね」

なるほど。

だけど、なら何故とめなかつたのだろう？ 怪訝な顔の妻に夫がたつた一言いう語る。

「ま、愛しているからね」

マリーは幸せだった。愛する男と一緒に、世界中の人間を道連れにして死ねるなんて。

「だけど核爆弾で焼け死ぬのは『めんだよ』。知ってるだろ？ 僕が火が苦手なの。核で死ぬより先にピストル自殺でいいかな？」

「もちろんよ、あなた」

しかし、豪華な邸宅に一発の銃声が轟いた。その直後である。精神を病んだ息子、地球連邦議長のネロが放った核搭載のミサイルがビバリー・ヒルズ上空で爆発したのは……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5536e/>

---

外れた予言

2011年1月13日02時35分発行